２０１５年度　正月山行
トムラウシ山　編

日時　　２０１５年１２月３０日～２０１６年１月２日
メンバー　秋元(L)、栗山、三上
場所　　トムラウシ山　温泉　冬尾根ルート
山行目的　厳冬期スキーツアー

記録

本山行は、正月を山で過ごすことをテーマに、毎年恒例にしている山行であり、今年で4年目となる。今年は新人の三上を追加し、紅一点のメンバーとなる。

本来であれば、事前のプレ山行を重ねて山行に挑みたいところであるが、全道的に雪が少ない年ということもあり、満足がいくほど練習を重ねていない。新人の三上にとっては人生で初となる厳冬期の冬山、かつ連泊ということで不安は人一倍であろう。

12/30　メンバーの休みの都合を事前に合わせて、17時に札幌を出発。夕食は清水町でおいしいものでも食べて山行に挑む予定であったが、さすがに田舎の年末。灯がともっているのはコンビニだけ。悩むことも許されず、コンビニ弁当で夕食を済ませる。21 時過ぎに改築されたばかりの東大雪荘に到着。少しだけ離れた駐車帯で就寝。放射冷却の影響なのか、すでに鼻の中が痛くなる気温だった。

12/31　トイレを東大雪荘でお借りして7時半に出発。緑雲橋を渡り廃道となった林道を進む。踝程度のラッセルなので疲労は感じないが、さすがにこの地域は雪が多い。ユウトムラウシ川左岸を 15 分程度歩くが、早くに渡渉地点を確保したいという心境からか、かなり下部での渡渉となった。冬尾根ははじめ急斜面の登行となるが、1時間ほどで広い森にはいる。新人の三上がコンパスを頼りにルートを構築するが、コンパスのダイヤルがなぜか緩く、触れるたびにダイヤルがクルクルと回ってしまう迷品。新人装備にはありがちなことだろう。

徐々に狭くなっていく尾根は C1300 辺りが雪崩斜面として知られており、それを避けるようにユウトムラウシ二の沢源頭をトラバースしてから、C1470 まで登り BC とする。雪深は250㎝と雪洞をつくるには十分な深さで、マキシムがほぼ埋没するくらいの雪洞をつくり、快

適なBC生活となった。今晩は三上特製の年越しそばであるが、冬山テント生活のマナーを教えながら偉ぶるつもりが、三上の気遣いや料理上手の影響で先輩の見せ場がないという状況であった。

1/1　2つ目低気圧の影響で、徐々に天候が下り坂となっており、トムラウシ山に向かうには今日しかないということで、7時に出発する予定であったが、夜間にテント周囲の除雪をしなければならない程の降雪と漆黒の早朝をみて、やはり明るくなってからの行動が最適と判断し出発は7時40分となる。暴風のなかでC1650までスキーで登行し、尾根が細くなる前にアイゼンに変えてスキーはデポした。カムイサンケナイ川カールは龍の背ともいえる幻想的な細尾根で美しい。暴風のため C1794 まで進んだところで、本山行の最高標高点として記念撮影。指先がピリピリとする寒さが、厳冬期に山に入っているということを実感させられる。

14時にはBCに戻ってきており、退屈なのでユウトムラウシ二の沢を滑降大会として遊びまわる。石狩後志地方はべた雪とのことだが、こちらは膝下パウダーで、極上パウダー三昧となる。BC に戻っても話は盛り上がり、気分は上々であるが、天候は回復の兆しが全くなく、予定を1日はやく切り上げて、明日下山することで満場一致。

1/2　昨日の極上パウダーを求め、沢中を滑りながら冬尾根にトラバースしていく作戦。馬鹿のひとつ覚えで登りに使った尾根を辿ろうとする私に対し、遊び心を忘れない栗山氏のアイデアはさすがだが、昨日と違うのは全装を背負っての滑走という点だ。当たり前のように転倒を繰り返しながら、冬尾根に乗る。

C1200あたりは、上部とは変わって穏やかな天候で、時間にも余裕があるので、荷物をデポして二の沢右岸を 1 時間ほど滑り倒す。帰りは僅かに残った登りのトレースを発見し、あっという間に駐車帯へ。親切丁寧な東大雪荘の温泉で入浴し、本山行を終えた。

温泉は平均10分程度しか入らない私とは対照的に、集合時間を伝えなければ3時間は温泉に入る三上のせいとは言わないが、帰路は16時。このまま札幌に戻るには腹が減るということで、以前から行きたかった、「鳥せい　清水本店」を標的に定める。札幌にも支店があり、全道チェーンとして老舗であるが、本店という響きはなぜか、期待してしまう。

山に入るとなんでもおいしくなってしまう現象も追い風となり、鳥から揚げ、鳥炭火焼きは最高の味で感動。地元客がなぜか注文するポテトフライは、ジャンクなイメージを覆

す絶品。すでに栗山、三上はジョッキを握りしめている・・・。

トムラウシは遠く、美しい山であり、また再訪したいと思う場所であったが、やはり「鳥せい」最高でした！！

秋元　健太郎